

『ビヤクシン』各ページ解説

1 記録が残る日本の歴史は1500年余。飛鳥・奈良・京都に都を置いて大陸の文化を取り入れて消化してきた700年間と、関東地方の鎌倉・東京に都を置いて日本文化が熟成した800年間に大きく分けられる。前半は天皇・貴族の時代で、後半は将軍・武士の時代。この二つの時代の変換点(ターニングポイント)が、1180年ここ湯河原で頼朝・実平旗挙げで始まる源平合戦だった。

2 天皇・貴族の「平安時代」は、天皇の兄弟争いに貴族達も家を二分して対立するが、自分達は武力を持たないから、馬や武器を持つ武士団を雇い入れて激しい戦争となる。1156年保元の乱 1159年平治の乱という二度の戦いを勝ち抜いたのは、後白河天皇と武士団平氏の棟梁、平清盛。敗れた一方の武士団源氏の棟梁、源義朝は死に、子の頼朝は伊豆国に流された。

3 源氏を破った平氏は、京の都で全国の荘園(農地)からの収穫を手に入れ、それまでの貴族も真似の出来ない贅沢な生活をおくり、政治を独占した。「平氏でなければ人間ではない」と豪語したから、武士の時代が来ると期待して平氏に味方した武士さえ重税に苦しみ不満が高まった。

4 都では平氏だけが威張り、優雅に暮す一方で、地方の武将は自らクワを持ち、家族・親類が力を合わせて重労働の農作業を続けていた。この協同作業によって、力を合わせて困難に立ちむかう東国武士の団結力の強さが育つのだが、相模国(神奈川県西部)、山がちの地に暮らす中村・土肥一族も平清盛への不満を高めていた。

5 中村・土肥一族を率いるのは土肥実平。昔、飢饉で米不足の時、兄弟の土屋宗遠・岡崎義実らと、伊勢神宮へ納める米蔵を襲って米を領民に分け与えた、腕っ節は強いが心優しい70歳過ぎの老武将。その領民の命を守る戦いを指揮してくれた源義朝に御恩を感じていて、息子の頼朝が山向こうの伊豆に流されて来たら彼の成長を見守っていた。

6 今から840年ほど前、源頼朝も34歳に成長し、いよいよ平氏を滅ぼす源氏の旗挙げが始まる。京で以仁王が立ち上がり、平家追討の命令書が全国に配られて頼朝にも届く。土肥実平は頼朝に平氏を滅ぼす決断をするよう迫る。北条氏など伊豆の武将、土肥一族、佐々木兄弟らに集結するよう呼びかけ、三嶋大社大祭の夜に監視役、平兼隆の山木館を襲うことを決めた。

7 平清盛から頼朝の監視を命じられた平兼隆は、伊豆地方の長官であったから、三嶋大社の大祭をやり

遂げた酒宴のあとで油断していた。酔いのさめない家来達も、深夜、屋敷になだれ込む源氏の武士に追い立てられ、兼隆も討ち取られた。勝利のノロシが上がり、北条館で待つ頼朝たちに初戦の勝利が伝えられた。

8 勝利はしても、頼朝の少ない軍勢では平氏の反撃に勝てない。味方を集めるため、源氏の先祖が八幡宮を祭った鎌倉に行くために山を越え、相模国の土肥館を目指す。同時に味方を集める使者を関東の武士達へ派遣した。他方、関東平氏の中心人物の大庭景親は、頼朝軍を倒すための大軍勢を集める命令を出したから、いよいよ決戦が近づいてきた。

9 平氏の政府を倒そうと土肥館に入って作戦を練り、寺社に必勝祈願をして頼朝・実平らは300騎で出陣した。が、鎌倉に向かう途中の石橋山には、相模・武蔵(神奈川県・埼玉県)の平家軍を率いる大庭景親らが3000騎の大軍をもって待ちかまえていた。頼朝軍、危うし…

10 頼朝軍に味方する三浦氏の援軍は、三浦半島から土肥館へ向かっていたが、折からの台風大雨で小田原の酒匂川が渡れず、出陣に間に合わない。石橋山の大庭軍に挑んだ頼朝軍の背後には、平氏方の伊東軍が追って来ていた。10倍の敵に挟まれて絶体絶命！頼朝は、初陣の佐奈田与一の活躍に期待した…

11 名乗り出た与一は奮戦するも、戦う最中にゼンソク症状が出て討たれ、雨降る夜の頼朝軍は、10倍の敵に次ぎつぎと傷を負って倒れ退く。実平の命令で、再会を約束して、敵に見つからないように少人数に別れて山中に逃げ込むことになる。

12 その後、頼朝が一週間ほど逃げられたのは、土肥の山々の地理を知り尽くした土肥実平が案内したからだった。箱根神社に隠してもらったり、谷の岩陰や倒れた大杉の穴に隠れたりもした。が、平氏方の大将大庭景親が梶原景時らと、その大穴をを見つけた時には、中に隠れた頼朝らはじっと息を潜めた。

13 大杉の穴に潜んでいた頼朝らを、梶原景時が見逃し助けたのは、とっさに考えたのか、戦い前から話し合わせていたのかは不明であるが、それはともかく、実平の案内で一週間も山中を逃げ回っていた頼朝らは、水はあっても腹が空いていた。どうした？ 実平の妻が「きび餅」などを密かに運んでいたのだ。

14 「土肥の大杉穴」の次は「土肥のしとどの窟」に隠れ、しばし実平の妻が運んだ「きび餅」で空腹を満たす日々。ふと、湧き水池の水面に写った自分のやつれた顔を見た頼朝は、自信を無くし自殺しようとする。それも実平が押しとどめた。次に「小道地藏堂」でも、純海和尚の指示で床下に隠れて敵の目から逃れ

ることが出来た。

15 山を下り海岸へ出て、真鶴岩之浦より舟で房総半島へ渡ろうとした頼朝ら八騎が見たものは、追ってきた敵兵が土肥館を燃やす煙や炎。皆が「これで、もう後戻りは出来ない！」とガッカリした時に、実平は意気消沈した頼朝の前で「焼亡の舞」を舞い、勇気を出せと励ました。

16 妻に房総へ渡る舟を用意させた実平は、「八人で船に乗るのは縁起が悪い。」という頼朝の発言に、長男の遠平を後から来させるようにしたり、隠れていた真鶴嶋ノ窟(しとどのいわや) から二羽の白い鷗が飛び立つことで航海の無事を確信して舟出し、ようやく房総(千葉県)へ上陸出来た。その後、続々と源氏の味方が集まり大軍となって鎌倉へ入った。

17 鎌倉に関東の多くの武将が「平氏追討に参加する。」と集まり、頼朝は平氏を倒す自信を持つ。このあと源氏と平氏の戦いは、1180年の富士川合戦、神戸のノ谷合戦、四国の屋島合戦、そして1185年関門海峡の壇ノ浦合戦で平氏が滅ぶまで長く続いた。実平は、頼朝の弟の義経を支えて最初から最後まで良く戦い勝利した。当時の人は「おごる平氏は久しからず」(平氏の栄華は長続きしない)とウワサしたとおりになった。

18 勝手わがままな振る舞いの平氏を滅ぼし、京の都に戻る凱進行進、源氏軍の先頭は堂々と馬に乗る80歳の土肥実平で「関東の武士のなんと勇ましいことか、武士の手本だのう、実平は！」と都の人々の評判になった。鎌倉に戻ってからは、源頼朝を支えて日本の歴史上、初の武士政権である「鎌倉幕府」を作る。故郷の土肥郷(湯河原・真鶴町)に源平合戦で命を落とした家来の供養のため「成願寺(のち城願寺)」を建てた。頼朝から恩賞でもらった沼田荘(広島県三原市)の開発にも力を注いだので湯河原・三原の両方に墓があり、老武将ながら新しい時代を築いたその名は、親子・兄弟・友との絆を大事にした武将として今も尊敬されている。

冊子名『ビュクシン』は、土肥実平の手植えで、鎌倉への出陣を見送った天然記念物樹齢900年城願寺の巨木、柏槇から名付けた。私達は、「親子・兄弟・友との絆が……時代を築く。子々孫々、命を繋いでいつも新しい今がある。」という気持ちで、この物語を綴った。平成31年3月21日 解説 加藤雅喜